

或る文學者の覺書

— 福田恆存素描 —

和田正美

であり、福田のやうな人がそれを受けつけなかつたとしても不思議はない。或は考を一步進めて、うがった解釈をすれば、彼の死後、より完全な、新しい福田恆存全集が出版された時、そこに他人の「解説」が附せられるのは確実なことであるから、福田は先手を打つて、その内容に歯止めを掛けようとしたのではなかつたらうか。
そんなことを考へながら「覺書」を読んで行つたら、その終り近くで次のやうな文に出会つた。

満遍なく私の書いたものにそれ相應に附合つてくれるほど親切な人はゐさうもない、戯曲も書き、劇評もし、小説にも手を出し、文學論もやる、翻譯にまで手を延ばすかと思へば、その他、國語、文化はもちろん、政治、社會現象に至るまで何にでも口を出す、さういふ男の相手など誰も面倒臭がつてしてくれはしない、「自分の手で用意した寢床なら自分で寝るしかない」、それゆゑ、かうして「覺書」を自分で書いてゐるのである。(註1)

福田が全集の「解説」を他人の手に委ねず、自らの「覺書」を以てそれに代へた理由がここには余す所なく與へられてゐると言ひたい所だがさうも行かない。それは彼が心にもない嘘を吐いたといふことではない。右の述懐はそのまま受取つて差支へあるまいが、しかし私達は彼の文の二義性に注意しなければならぬのである。

福田の仕事が多岐に渡つてゐるため、それに満遍なく附合はうとする人がゐないのは必ずしも彼等が「親切」でないからでも、「面倒臭がつて」ゐるからでもないであらう。端的に言へばさういふことはしたくても出来ないものであり、福田自身、そのことは承知してゐるに違

昭和六十二年から六十三年にかけて刊行された福田恆存全集全八卷は著者生前の自選集であるから、「全集」としての完成にはほど遠いが、それでも、福田の仕事の内実を知りたいと願ふ読者にとつては今の所これが最上の資料であらう。所でこの全集には甚だ面白い特徴が一つある。それはこの種の著作物につきものの「解説」がなく、その代りに、著者自身の手になる「覺書」が第七卷と第八卷を除いた各卷に附せられてゐることである。(第七卷と第八卷の「覺書」は紙幅の關係から第六卷に繰上げて書いてある。)

福田は何故かういふことをしたのだらう。それは彼の自認する職人氣質が「解説」といふ名の夾雜物を嫌つたからなのか。他人の書いた解説はどれほどよく出来てゐても読者の鑑賞の自由を縛りがちなもの

ひないのである。

しかしそれはどうであれ、福田恒存全集が著者の「覺書」で貫かれたことは甚だよかつたと思ふ。私達はそれの御蔭で福田恒存といふ風変わりな——この「風変わりな」といふ言葉を私は最も肯定的な意味で使つてゐる——文学者或は（これも言葉の最上の意味で）藝術家の世界に何ほどか参入せしめられる。彼の「覺書」は凡百の「解説」のあづかり知らない功德を施したといふべきであらう。

勿論、この「覺書」は全集の本文に附せられたものであり、本文を読んだ上でそれに眼を通すことこそ正統的なやり方ではあるが、すぐれた批評はその対象として扱はれた作品から独立した一箇の「作品」と見做すことが出来るのと同じ見地から、この「覺書」だけを頼りにして福田の精神と生活の軌跡を辿ることも或る程度まで可能な筈である。

私はさう考へて以下に「覺書」のささやかな分析を試みることにした。

ここでもう一度、右の引用文に戻ることにした。福田は「解説」ならぬ「覺書」を自分で書いてゐる理由を説明した後、以前に著作集と評論集を出した時にも全部自分の手で始末したと付加へ、「以上、威張つてゐるのではない、この年になつて少々くたびれたと愚痴を零してゐるのである」と述べてゐるが、これを弱気の告白と見て、それに引きずられるやうな愚を犯してはならない。それどころか、第一の引用文に並々ならぬ自信が現れてゐることは私とその文との関連で指摘した所から明らかであらう。

自信と書いたが、実際、私達はそれを「覺書」の随処に見出だすこ

とが出来た。すでに述べた通り、「覺書」は第六巻で終つてゐるが、福田はその末尾の一節の中で、読者に呼び掛けて、次のやうに記した。

折角、ここまで読んで、とは言はぬ、買つて来てくれた以上、「覺書」が終つたからといつて、これで打切らずに、後の二冊にも附合つて戴きたい、一つには年譜が附いてをり、他の一つは私には珍しい創作集である、意外な拾ひ物になるかも知れない。それにここで後を缺いてしまふと大事なところを読み落す。（傍點、福田。註2）

少なくとも日本の文学者の中で果して何人がこれだけの自信から読者に接することが出来ただらうと思はせられる一方、私は一部のナイーブならざる読者がこの文に接して微笑したり苦笑したりしてゐる情景をも想像しないではゐられない。この文には遊びの要素が含まれてゐる。だから私達は筆者に一応の敬意を表した上で、これを読み流してもよい。しかし次のやうな文になるとさうは行かないであらう。

私はもう何十年も前に政治と文學との峻別を説いた。が、それは少々間違つて受取られたやうである。（註3）

「平和論にたいする疑問」は、読んでもらへば分るだらうが、今日の目から見れば至極當り前のことを言つたに過ぎない。（註4）

福田はここで自らの「何十年も前」の言論をいささかと言へども修

正する必要を認めてゐない。念のために記すと、この第二の引用文は福田がその「平和論にたいする疑問」のせいで、『保守反動』呼ばはりされ、論壇からいはいゆる『村八分』の処遇を受けるに至つてから三十数年後に書かれたものである。

いふまでもなく私達は或る人に自信があるといふ、そのことだけで、その人を評価することは出来ない。自信が無知、傲慢、おめでたさなどの別名に過ぎないことが多いのは誰しも知る所であらう。要するに自分の本當の姿が見えてゐないのだ。これはどんな才人にもついてまはる危険であるときへ言へるかも知れない。

しかし幸か不幸か福田の自信をそのやうにあしらふことは出来さうもない。私達は彼における断定的な自信を支へてゐるものに眼を注ぐべきである。私にはそれは過去の自分と「覺書」を書いてゐる現在の自分との間の距離の無さであるやうに見える。と言つてしまへば如何にも表現が拙劣なので、言ひ方を変へると、福田は過去のどんな時期における自分をも現在の自分に直接つながるものと意識する所からその「覺書」を書いてゐる。それは彼に進歩、発展がなかつたといふこととでなく、問題の在り処が常に同一なのである。

「覺書」だけを読んでゐても判ることであるが、彼の論調は終始、ものの見事に、遣切れなくなる位、一貫してゐるのだ。

福田のさういふ精神は当然のことながら生得のものであるが、興味深いのは彼がその淵源を自らの生れ育つた環境と周囲の状況とのかかはりの中にも求めてゐることである。「氣質的には良くも悪くも職人であり、下町人種であつた」福田は学校生活を送りながら、「擬似インテリ族との論争は私の生活環境からすれば全く足が地についてゐな

いやうに見えて、何とも空しかった」と感じたさうであるが、ここで注目すべきは、彼が当時の自分を顧みて、「孤独」といふ言葉を持出してゐることである。

(大學では)あたりを取巻く「知識階級」といふ異人種の包圍網に遭ひ、さうかといつて身方の下町人種は大震災火災後、もはや周圍になく、どつちへ轉んでも孤独であつたのだ。(傍點、和田。註5)

(恒存といふ名のいはれを説明して)私は捨てられた臣でも妾の子でもないが、彼等がいづれも孤独であり、私も孤独だつたことだけは當つてゐる。(傍點、和田。註6)

福田のいはゆる「孤独」に注目した方がいいと思ふ理由は二つある。その一つはこの「孤独」を「孤立癖」に置換へれば、これこそ福田の精神の在り方を側面から、しかし最も端的に言ひあらはす言葉になることである。実際、彼の孤立癖とそれが發揮する力はほとんど無気味ときへ言ひたいほどであり、さう考へれば、彼の青少年時代の「孤独」はその生涯の最後まで——と言つても彼はまだ健在であるが——続いたことにならう。

福田の「孤独」に注目しておきたいもう一つの理由はそこに感傷的な意味合ひも否定的な意味合ひも全く籠められてゐないことである。彼は不具な、或いは不毛な孤独といふ近代病につひぞ陥ることがなかつたのではないか。後年の彼がこの病の所在を知悉するに至つたにもかかはらずである。

その点がこの「覺書」の中で度々引合ひに出されてゐる小林秀雄や中村光夫と福田恒存の違ふ所であらう。小林と中村も福田と同じく近代病の諸相に通じてゐるが、彼等の場合には、文学に身を誤らされて薄汚い青年時代を送つたことへの苦い反省がその文学活動の発条の一つになつてゐる。しかし福田にはさういふ趣は見出だせないのである。

開放した見方をすれば、青年時代の福田には若さがなかつた。かう言へば福田の愛読者は怒り出すであらうが、私はこの若さといふ言葉を限定的な意味で使つてゐるのである。そして驚いたことに若さの欠如は老の欠如でもある。

生涯のあらゆる時期における自分をそのまま現在の自分であるとすゝる精神は老を知らない精神であると言へよう。福田には青年に通用の、未熟な、それだけにかへつたのもしい若さがなかつた代りに、それを越えた、全生涯的な、いふならば永遠の若さがあつたやうに、いや、あるやうに見える。

私は「覺書」を読みながら、それを七十六、七歳の老人の手になるものとはどうしても思へなかつた。何か只事ではないといふ気がする。

二

前章で取上げた「孤独」の意識についての回想は次のやうな展開を見せる。

さういふ孤獨な人間に事件は起らない。事件はすげなく私のそばを素通りして行つてしまふ。戦争もさうだつた。あれほど世界を

動かした大戦争だが、私の關心は全くそこにはなかつた。(傍點、和田。註7)

仮にこの箇所だけを、筆者名を伏せて見せられたら、誰もこれを書いたのが福田恒存であるとは答へられないであらう。福田と言へば戦争の問題を含めた政治的、社会的発言によつて有名であり、さういふ人が現実の戦争に無関心であつたとは信じ難いからである。

私自身、初めてこの文に接した時には驚いたが、福田に見られる激しい政治的、社会的関心とそれを一見裏切るかの如き戦時中の戦争無視の態度との間に横たはる溝を埋めるのはおそらく次のやうな思考方式であらうと思はれる。

私はすべての問題を平和と戦争といふ二つの因子だけで解かうとする風潮に反対してゐるのです。平和と戦争とのいづれの時世にもかかはらず一貫して私たちの人間の心を領してゐる問題があるはずで、それこそ最も重要なことがらであるといつてゐるのです。(註8)

平和と戦争を問ふのなら、その問を發する場所にこそ意を用ひ、心を勞さなければならぬといふ意識がここにあると言へよう。それをしないでただ単に平和と戦争の二者択一を突きつける知識人を福田は繰返し攻撃した。

それでは福田が平和と戦争を論じ、社会の病巣を抉り出す時、その発言の根底に当然なくてはならないもの、彼の表現を借りれば「いづれの時世にもかかはらず一貫して彼の心を領してゐる問題」は何であ

るのか。

私見によれば、人間とは何か、文化とは何かといふ問題がそれであり、福田においてこの二つの間は同じものである。

福田を論ずるのなら、彼のこのやうな二重性によく注意して掛らなければならぬ。さもないと彼に反対する場合にも、また、賛成する場合にすら、彼の手玉に取られて、翻弄されるのが落ちであらう。

日本の反體制的知識人の多くが真面目な人達であり、彼等の間にもニュアンスの相違が多々あることを思ふ時、福田の肩だけを持つのは危険だといふ氣もするが、さう考へても尚、彼等のやうな政治化した知識人よりも福田の方が日本社会の姿を正確に見てゐるといふ印象は拭ひ難い。

戦争中は誰も何も言へず項垂れて「暗い谷間」を歩いてゐたやうな殊勝なことを言ふ者が多いが、それは眞赤な嘘である。今の若い人たちに話して聞かせる「戦前」とはこのやうな虚偽が少くない。一度、座談會でもして、事の眞偽を確かめた方がいい。忘れっぽい私にしても、まだまだ「自由」だった實例を知つてゐる。その手で行けば「戦後」の嘘もまた幾らでも出てくるだらう。

(註9)

戦前の日本は自由のない暗黒時代だったが戦後になつてやうやく国民の自由が戻されたといふ、私達がいやといふほど聞かされた神話から福田は完全に解き放たれてゐる。そして戦前と戦後の連続性を回復することは私達にとつて急務なのである。過去への反省はそれが行

或る文學者の覺書 和田正美

はれた上での話であらう。

戦前の一時期に軍部の強権が国民の自由に様々な制約を加へたことは残念ながら事実であつたらうが、戦後にはアメリカ占領軍の、それを上回る権力が国民に擬似的な自由を与へ、しかも（これは一概にアメリカだけの責任とは言へないが）国民の大多数はそれを眞の自由と錯覚し、そのやうな心理的習慣は占領が終つた後もしぶとく生き延びた。

福田はそのことを鋭く見抜いて、占領下の昭和二十二年における二・一ゼネストがマッカーサーの命令で中止されたことを取上げ、そのゼネストの「首謀者諸氏の迂闊な意識」を指摘してゐる。

彼等が占領下においてゼネストなどといふものが可能だと考へたのも、詰りは「最強の敵」を「最大の身方」だと思ひ込んだからにはかならない。(註10)

同じ昭和二十二年の雑誌「近代文学」の座談會「平和革命とインテリゲンチヤ」の中で荒正人が「今われわれが當面してゐる革命」と言つたことを問題にして福田は「覺書」の中で次のやうに記した。

「革命」にも何にも、われわれは當面してゐはしない、今の「變化」はすべて占領軍によつて當面させられてゐるだけのことではないか。河上徹太郎が言つたやうに所詮は「配給された自由」である、言ひ換へれば「配給された革命」である。(中略)手取り早く言へば、「インテリゲンチヤ」も民衆も本當に何が欲しいか解らず、ただ何も彼もアメリカの指圖を待つてゐただけではない

のか。(註11)

アメリカ占領軍の意のままに動かされる日本の姿がここに描かれ、その現実からとかく浮き上つて革命幻想にしがみつきがちな知識人の姿がそれに対比されてゐるが、それよりもっと重要なのは、日本にとつてのアメリカを福田がどう考へてゐるかといふことである。二・一ゼネストでは「最強の敵」が「最大の身方」に誤認されたのだといふ、その「最強の敵」はゼネストの「首謀者諸氏」にとつての「敵」であるのみならず、福田においても「敵」と感知されてゐるのではな

いか。
福田恒存と言へば一頃、その「親米」的言辭によつて反米的知識人から忌み嫌はれたものであるが、福田は(少し皮肉な言ひ方をすれば)戦後の平均的日本人の意識をよく代表する親米派では決してない。福田はむしろ言葉の微妙な意味における反米意識の持主であり、それだけにかへつて、「アメリカはそれにどれほど衝突しても結局日本の面倒を見てくれる」といふ甘えを底に忍ばせた反米の軽薄さに腹を立てたものと考へられる。

全集の第六巻には有名な「當用憲法論」が収められてゐるが、この巻の「覺書」は三巻分をまとめて書かなければならなかつたせゐであらうか、そこには現行憲法の意味、無意味についての言及がない。しかし福田の憲法談義は日本国憲法を日本国民の生き方とは縁もゆかりもない、アメリカ製の翻訳憲法に過ぎないとするものだつた筈である。

以上のことから、福田は戦後の日本にだけ難癖をつけて戦前の日本

には郷愁を感じてゐるのだらうと考へる人があれば、それは誤りといふものである。

日頃から「マス・コミ」を個人の生活の一部に位置づけ、集團的自我にそのつきあひをさせて、個人的自我は深部に取つておくといふ近代人の「精神の政治學」を心得てゐないことに、日本の近代史の弱點があるのだ。

そして皮肉なことに、明治以來の「近代化」はさういふ弱點を利用することによつて、世界史に類のない大成功を収めたのである。が、それはあくまで制度、經濟などの物質面における「近代化」に過ぎず、それが異常な成果をもたらしただけに、その蔭では精神が未熟のまま放置されてゐただけだ。そして、その兩者の矛盾を維持することの辛さが、時折、國民を輕舉妄動に走らせる。かうして私達の歴史は右から左へ、左から右へと、事前には全く豫期できず、事後には夢としか思はれぬほどの、そして外國人には決して理解できないやうな極端な轉換、ないしは「盛上り」を示してきた。(註12)

これは昭和三十五年の安保騒動に際して、進歩派の論客である丸山眞男の意見への批判として書かれた文の一節であるが、一読して判る通り、福田は人間の自我を集團的なそれと個人的なそれに分けて、兩者のバランスを計ることが出来ない精神の未熟に「日本の近代史の弱點」を見てゐる。その「弱點」が戦前と戦後を貫いてゐることに私達は注意しなければならない。

福田はこのやうに自らの二十数年前の文を引用した後、「覺書」の

地の文を次のやうに記してゐる。

だが、その「政治主義の悪」の代りに、今私たちの前には「經濟主義の悪」が立ちほだかつてゐはしないだらうか。(註13)

日本が經濟大国になつたからと言つて喜んではゐられない。要は國民の精神のあり方だと福田は言ひたいやうに見える。

もつとも明治以来の「私達の歴史」が「極端な轉換、ないしは『盛り上り』を示してきた」ことが事実としても、その原因を國民の精神の未熟といふ一点に絞つてよいものかどうか、検討を要するであらう。

三

福田恒存が国語国字において正統表記を主張し、実践してゐることはよく知られてゐるであらう。彼は戦後の国語国字の改革を問題にして次のやうに述べてゐる。

幾多の先學の血の滲むやうな苦心努力によつて守られて來た正統表記が、戦後倉皇の間、人々の關心が衣食のことにかかづらひ、他を顧みる余裕のない隙に乗じて、慌しく覆されてしまつた、まことに取返しつかぬ痛恨事である。しかも一方では相も變らず傳統だの文化だのといふお題目を並べ立てる、その依つて立つべき「言葉」を蔑ろにしておきながら、何が傳統、何が文化であらう。なるほど、戦に敗れるといふのはかういふことだつたのか。

(傍點、和田。註14)

全くその通りであるが、この一節の結びの文の中には何とも言へない味ひがある。読む人によつてはこれを唐突と感じもしようし、中にはこれを單なる現状不満派のいやがらせとして受取る人もあらうが、私に言はせれば決してそんなことはない。ここで敗戦は政治的、社会的事件たるにとどまらず、私達の傳統、文化の根幹を揺がした事件としても把握されてゐるのだ。

言葉は道具、符牒といふやうな、私達の外側に位するものではなく、私達の内側で息づいてゐる。少し大袈裟な言ひ方をすれば、福田にあつて言葉は私達の生そのものである。とすれば言葉は人間と同じく手に負へない生き物であることにならう。

私は前章で福田恒存論の筆者は福田の二重性に注意する必要があるらうと言つたが、同じことをここで繰返し述べておかなければならぬ。福田における正統表記の主張を論破しようとするのなら、彼が言葉、文化を、人間をどう考へてゐるかといふことに着目して、それらもろもろの論に矢を放たなければならぬのである。

「私はいつも言葉のことが氣になつて仕方がない」と言ふ福田は、「覺書」の中でも言葉の問題に多くの言葉を費やした。その中には次の一節が見える。

私は文法といふものが初めに話し言葉があつて、それから出て來た「言葉の法」だとは思ひたくない、「初めに法ありき」といふ觀念論の方を信じたくなる。普段使つてゐる話し言葉はその法を目指し、法に引きずられながら、法に合はぬ道をふみ迷ふ惡戰苦闘の姿なのではないか。(註15)

私達はとかく言葉があつて文法があるのであり、その逆ではないと考へがちであるが、さういふ考へ方は、文法のための文法、すなはちそれ自体としては正しいのかも知れないが言葉の運用に何等働き掛ける所があるまいと思はれる文法には当てはまるとしても、一般的には、むしろ福田のやうにきつぱり考へた方がよいのではないだらうか。ここで説かれてゐる「観念論」は幼児の成長過程を観察することからも納得出来るやうに思はれる。

當面の問題に関係はするが、そこから何ほどか離れた事柄をここで取上げると、福田は昭和二十年代のチャタレイ裁判より得た教訓として、「話はすべて相手の誰にも通じるやうにせねばならないといふことが解つた」さうであり、「もしさうでない文章があつたとしても、それは話そのものが相手に通じにくい場合だけであらう」と述べてゐるが、彼の文章はそれほど通じやすく、判りやすいであらうか。確かに彼はジャーゴンを使はないので、その文章は一見した所では誰にでも樂に意味が取れさうであるが、その実、それは時として、晦渋とまでは言へないにしても、脈絡を推し量ることが容易ではない、さういふ類の文章である。これは私が迂闊な読者であるからかも知れないし、福田の文章は常に何かを引きずる形で書かれてゐる所から、さうならざるを得ないのであらうが、私のやうに「迂闊」な読者は他にもあるだらうと思はれるので敢へて書くことにする。

たとへば次の文はどうか。

「軍事大國」にも「經濟大國」にも成らうと思へばすぐ成れる、その誘惑にはつひに克てず、己が一生を二色に染め分けて生きようとしたのが近代日本の姿であつた、それが今、やうやく私たちが

の意識に上りつつある、假にさうだとしても、日本のためにそれが良いことか悪いことかは別箇の問題であらう。(傍點、和田註16)

實を言へばこの文は前章で引用したかつたのであるが、内容につきみあぐねるところがあつたので、本章にまはした。

傍點を打つた三つの箇所の内、第一の「それ」は、「軍事大國」で始まり「近代日本の姿であつた」で終る部分全体を指してゐるのであらうが、「仮にさうだとしても」といふ仮定が蔽ふ部分はどれであらう。「軍事大國」から「近代日本の姿であつた」までの断定的な調子は仮定にそぐひさうもないといふ見地よりすれば、「仮にさうだとしても」の「さうだ」は「それが今、やうやく私たちの意識に上りつつある」を受けることになり、第二の「それ」の指示内容もやはり同じといふことにならうが、「それが今、やうやく私たちの意識に上りつつある」ことが「日本のために良いことか悪いことか」と問ひかけるのは少し妙である。むしろこの「さうだ」は「軍事大國」以下、「私たちの意識に上りつつある」までの全文を指すものと考へたいが、その場合、第二の「それ」はこの仮定から離れて、「私たちの意識」を除外した「近代日本の姿」を指示するものと考へなければならぬ。しかし「近代日本の姿」であつたとされる「その誘惑にはつひに克てず」の否定的な調子は、「良いことか悪いことか」といふ二者択一にすんなりとは結びつかないやうな気がする。

かう書いたからと言つて、福田の文に時として現れる判りにくさを咎めてゐるのではない。もつと「判りやすく」書いてくれと求めてゐるのでもない。福田のやうな人に向つて、そんなことは口が裂けても

言へない。ただ、彼の文章の呼吸はその微妙さのあまり、読者を混乱に誘ひこむことがあるのではないかといふ印象を率直に述べたまでである。

その点、福田は彼が讚嘆してやまない小林秀雄に似てゐると思ふ。

彼等は二人とも曰く言ひ難いことを言ひあらはさうとして、時々、読者に首を傾げさせる文を書かざるを得なかつた。彼等の文には「筆者の息遣ひ」(註17)が感じられる。それは悪文に見えることもあらうが、事実はその逆である。後世の読者が昭和時代の文学を概括する時、福田恒存は小林秀雄に並び称されるかも知れない。

「覺書」の中には興味深い話題がまだ幾つも含まれてゐるが、所定の枚数に近づいたので、もう打切ることにした。以上、大学の研究紀要に発表する論文としてはいささか非学問的な、評論風のものになつてしまつたが、福田のやうな現役の文学者は単刀直入に扱つた方がいいやうに思はれる。そう言へば、最近、福田恒存論がほとんど書かれてゐないやうに見えるのは淋しいことである。人は福田をおそれるものであらうか。確かに福田を論ずることはそれ相当の覚悟を必要とする。俳優の芥川比呂志は福田と一緒に演劇の仕事をしてゐた頃、彼を評して、「福田さんはドライ・アイスのやうな人だ、冷たいがそれに触れば火傷する」と言つたさうだが、適評といふべきであらう。が、火傷をおそれてゐるは何も出来はしない。福田を敬して遠ざけておく法はない。彼は私達の文学世界の中に、或は精神世界の中に位置づけられなければならないのである。私はどちらかと言へば福田に肩入れする立場から、この論文を書いたが、彼のすべてを受入れようとまで考へてゐるわけではない。しかし私がつと本格的に福田を論じ

或る文学者の覺書 和田正美

ることがあつたとしても、それは先の話である。それより早く誰かの手で福田恒存論があらはされたら、それが福田と全面的に対決するものであつても、私は喜んでそれに眼を通すであらう。

(言語文化学科 教授 日欧近代文学)

註

株式会社文藝春秋より刊行された福田恒存全集全八巻の第一巻から第六巻までの各巻の末尾に記された「覺書」によつてのみ記した。次に掲げるアラビア数字の下の漢数字は全集の巻数番号であり、同時に「覺書」の番号でもある。

1	六	686	ページ
2	六	711	ページ
3	六	692	ページ
4	三	598	ページ
5	一	658	ページ
6	一	658	ページ
7	一	658	ページ
8	一	600	ページ
9	一	663	ページ
10	一	670	ページ
11	一	658	ページ
12	五	624	ページ
13	五	624	ページ
14	四	640	ページ
15	三	607	ページ
16	五	623	ページ
17	六	686	ページ

尚、引用文の註は独立した引用文の場合だけに限つて、引用文を地の文の一部として扱ふ時には註記しない方針で通したが、この箇所だけは例外とし、左にこの「筆者の息遣ひ」を含む文の一部を記しておく。

われわれは文章といふものをすべて他人のせりふで書いてゐるのだ、それを如何に自分のせりふにするかが問題なのである。さういふことを少しも考へに入れてゐない筆者の書いたものは、

その文章の脈絡をひとへに一語一語の概念の結びつきだけに頼らねばならず、幾ら「てにをは」を用ゐてあらうと、そこには筆者の息遣ひといふものが全く感ぜられない。(傍點、和田)